

第183回～第213回

☆放送時間☆

期間	曜日	時間帯
昭和50年9月 1日～ 昭和50年9月29日	月	21時00分～ 21時55分
昭和50年10月6日～ 昭和51年3月29日	月	21時00分～ 21時54分

司会: 神山繁 (第183回～213回)

三ツ矢歌子(第183回～213回)

レギュラーゲスト: 遠藤実(第183回～203回)

語り: 奈良岡朋子(第183回～213回)

☆凡例☆

- | | |
|-------------|-------|
| ①サブタイトル・放送回 | ②出演者 |
| ③曲目(歌唱者)(※) | ④放送概要 |

※出演順が判明している回は、冒頭に太字で(出演順)と記入)

昭和50年

昭和50年9月1日

- ①「熱唱！こころの演歌」 #183
- ②美空ひばり、五木ひろし、ディック・ミネ
- ③「港町十三番地」(美空・五木)、「三味線マドロス」(美空)、「ひばりのマドロスさん」(美空)、「哀愁波止場」(美空)、「リンゴ追分」(美空)、「夜霧のブルース」(五木・ディック)、「或る雨の午後」(ディック・美空)、「人生の並木路」(ディック・美空・五木)
- ④ “日本人の心にしみる歌”をキャッチフレーズに大人の歌謡番組として好評を博してきた「にっぽんの歌」が半年ぶりに再登場する。新司会者は、アットホームな雰囲気を持つ神山繁、三ツ矢歌子のコンビ。新しい趣向としては、作曲家の遠藤実がレギュラーゲストとして毎回登場し、メインゲストとの対談を通して、貴重な人生体験や、忘れ得ぬ心の歌を引き出す。

新シリーズ再開第一回は、美空ひばり、五木ひろし、ディック・ミネという各世代の大物が出演、おなじみのヒット曲を披露する。

第一部は“ひばりのマドロスもの特集”で港がテーマ。美空と五木の「港町十三番地」、美空の「三味線マドロス」、「ひばりのマドロスさん」などのマドロスもののメドレー。38度以上もある高熱を押し出演した美空は、「港町十三番地」を五木とワンコーラスずつ歌い、「ひろしは、私の歌をみんな私よりうまくまねしちゃう」と大笑い。

続いてディック・ミネが登場。この番組の司会者として親しまれた故・加東大介を偲んだ後、五木と”長崎もの”を競演する。後半は五木とミネ「夜霧のブルース」、ディックと美空「或る雨の午後」、三人で「人生の並木路」を一番ずつと三人三様の味を聞かず構成は面白い。

遠藤は“遠藤実こころの歌”のコーナーを受け持ち、豊富な経験、人情味のある熱っぽい語り口で、ゲストの歌手とのやりとりを中心に、ヒット曲にまつわるエピソードを加えながら心の歌を探っていく。今夜は美空、五木を相手に、どん底の生活体験から得た彼自身の”演歌の哲学”を語る。

他に視聴者の”思い出の歌”コーナーがあり、奈良岡朋子がナレーションを担当する。

同日付の読売新聞東京版朝刊では、「三人三様の味に興味 見せ聞かせるひばり」と題して、記者が番組の感想を以下の通り綴っている。

ひばりはやはり感心させる。歌の意味と感情を顔と体全体で表現し、声を細く太く、時には巻き舌も使う。千変万化の技巧は、マユの動き一つでもちゃんと見せて、聞かせる。五木は名手だが、ひばりとはまだ距離がある。歌に感情こめるのに熱心なのはいいが、それが歌うよりも「語る」ように聞こえる時がある。ディックの方にもっと”歌”を感じる。

総じて、ほめ合いが多すぎるのが気になった。

なお、関西では第一期はサンテレビ・近畿テレビが放送していたが、第二期は朝日テレビが放送。

昭和50年9月8日

- ①「競演・花の演歌ぶし」 #184
- ②村田英雄、舟木一夫、三沢あけみ、八代亜紀、ちあきなおみ
- ③「皆の衆」(村田)、「人生劇場」(村田)、「無法松の一生」(村田)、「三百六十五夜」(舟木・ちあき)、「湯島の白梅」(舟木)、「むかえ火」(舟木)、「すみだ川」(三沢)、「船着場」(三沢)、「悲しき子守唄」(三沢)、「ともしび」(八代)、「明治一代女」(八代)、「十三夜」(ちあき)、「さだめ川」(ちあき)

- ④ 日本の歌の心をもっともよく表していると言われる”演歌”。時代が変わっても、すたれない人気はこんな所にあるようだ。演歌を中心に、日本調のヒット曲を特集する。

番組は、演歌の大御所、村田英雄、八代亜紀、三沢あけみ、ちあきなおみ、舟木一夫をゲストに、その真髓を探っていく。5人は着物姿で日本情緒をたっぷり聞かせる。

“遠藤実コーナー”は、村田英雄が「人生劇場」を歌い、演歌のこころ、根性とは何かを語り合う。デビュー当時の苦労話、エピソードなども語る。

“思い出の歌コーナー”は、東京都・練馬区に住む主婦・村岡千鶴子さん(49)のリクエストで「悲しき子守唄」。苦しかった戦争中の生活を振り返り、三沢がしみりと歌い上げる。

昭和50年9月15日

- ①「大演歌！日本縦断」 #185

②北島三郎、水前寺清子、都はるみ、青江三奈

③「函館の女」(北島・水前寺・青江・都)、「長崎ブルース」(不明)、「東京でだめなら」(不明)、「祇園小唄」(都はるみ)、「おてもやん」(水前寺清子)、「上海帰りのリル」(不明)

- ④ 演歌の代表選手とも言うべき北島三郎、水前寺清子、都はるみ、それに都会調ムード演歌の青江三奈を加えたメンバーで、日本各地の地名を盛り込んだ演歌を特集。

出演者がそれぞれ幼年時代の写真を持ち寄り、思い出を語った後、生まれ故郷にちなんだ曲を歌う。オープニングは北島の大ヒット「函館の女」。一番を水前寺と、二番を青江と、三番を都と、北島がデュエットする。続いて「長崎ブルース」「東京でだめなら」とご当地ソング。京都生まれの都は、「祇園小唄」、熊本生まれの水前寺は「おてもやん」ほか。

“遠藤実・心の歌コーナー”は、遠藤が苦しかった工員時代に愛唱した”オカッパルぶし(岡晴夫の歌)”の特集。水前寺が岡晴夫のリバイバル曲を熱唱する。

“思い出の歌”は三鷹市の主婦・京極林子さんのリクエストで「上海帰りのリル」。

昭和50年9月22日

- ①「バタヤン涙の絶唱！港・盛り場・なみだ唄」 #186

②田端義夫、青江三奈、ちあきなおみ、三条正人、森昌子

③「玄海ブルース」(田端)、「別れのブルース」(青江)、「港が見える丘」(ちあき)、「池袋の夜」(青江)、「熱海ブルース」(ちあき)、「柳ヶ瀬ブルース」(三条)「真白き富士の嶺」(田端)、

- ④ 田端義夫、青江三奈、ちあきなおみ、三条正人、森昌子という顔ぶれで、港や盛り場にちなんだヒット曲を特集。

第一部は、”波止場もの””マドロスもの”の中から、田端が「玄海ブルース」、青江が「別れのブルース」、ちあきが「港が見える丘」ほかを歌う。

第二部は”盛り場もの”特集。青江が持ち歌の「池袋の夜」、ちあきが「熱海ブルース」、三条が「柳ヶ瀬ブルース」を披露。

“遠藤実・こころの歌”は、昔、盛り場で流していた遠藤が作曲家を志したのは、田端の「ふるさとの灯台」を聞いて感動したのがきっかけだったというエピソードを披露。そして、田端が登場、父親のいない貧困の中で育った田端の少年時代の思い出や、母の追憶を語る。おかあさんをテーマに遠

昭和50年

藤が田端に色々と話を聞くが、人情家の田端は、「真白き富士の嶺」を歌う段になると声が詰まった。
「泣くまいと思ってたんだけど、オレはああいう話に弱いよ」と大テレ。

昭和50年9月29日

- ①「哀愁演歌十八番」 #187
- ②春日八郎、水前寺清子、フランク永井、三橋美智也
- ③「別れの一本杉」(春日・三橋)、「有楽町で逢いましょう」(フランク)、「古城」(三橋)、「長崎の女」(春日)、「いっぼんどこの唄」(水前寺)、「君恋し」(フランク)、「涙の渡り鳥」(水前寺)、「無情の夢」(春日)、「国境の町」(フランク・水前寺)、「男の純情」(水前寺)、「緑の地平線」(春日)、「おんな船頭唄」(三橋)
- ④ 春日八郎、フランク永井、三橋美智也に、”紅一点”の水前寺清子を加えて、”日本のスタンダード・ナンバー”ともいべきヒット曲の数々を紹介する。

第一部は各自のヒット曲集。春日と三橋は「別れの一本杉」をデュエットする。

第二部「昭和初期のヒット曲特集」では、曲にまつわるエピソードや当時の世相などを振り返りながら、フランクが「君恋し」、水前寺が「涙の渡り鳥」、春日が「無情の夢」、フランクと水前寺で「国境の町」を歌う。

“遠藤実・こころの歌”は、古賀政男メロディーの特集。遠藤が「影を慕いて」をギターの弾き語りで歌い、古賀メロディーが人々に愛される秘密、古賀メロディーと日本人の情念とのかかわりなどを分析する。また、作曲家としての遠藤が古賀メロディーから受けた影響を語る。

そのあと、水前寺が「男の純情」、春日が「緑の地平線」を歌う。

視聴者のリクエストによる”思い出の歌コーナー”は、仙台市に住む主婦、狩野むつ子さんのリクエストで、三橋の「おんな船頭唄」。昭和31年、39歳で亡くなった狩野さんの叔父さんの愛唱歌。叔父さんの思い出をつづった手紙を奈良岡朋子が朗読した後、三橋が切々とこの曲を歌う。

昭和50年10月6日

- ①「ひばり・北島・森、演歌の神髓！」 #188
- ②美空ひばり、北島三郎、森進一
- ③「ひばり仁義」(不明)、「兄弟仁義」(不明)、「出船」(不明)、「哀愁出船」(不明)、「襟裳岬」(不明)、「悲しい酒」(美空)、「ギター仁義」(北島)、「星影のワルツ」(森)、「ひとりぼっち」(美空)
- ④ 美空ひばり、北島三郎、森進一の実力派ビッグスリーの顔合わせで、演歌の神髓を心ゆくまで味わってもらおうという趣向。

第一部は、美空と北島の”仁義もの”特集で、「ひばり仁義」「兄弟仁義」など。

第二部は、美空と森の”港もの”特集。曲は「出船」「哀愁出船」「襟裳岬」。

“思い出の歌”コーナーは、美空の「悲しい酒」。

“遠藤実・心の歌”は、北島が「ギター仁義」、森が「星影のワルツ」、美空が「ひとりぼっち」を歌い、遠藤が、歌における”こころ”の大切さを話す。

昭和50年10月13日

- ①「慕情！恋と涙の人生演歌」 #189
- ②島倉千代子、春日八郎、こまどり姉妹、殿さまキングス、加橋かつみ、真木ひでと
- ③「からたち日記」（島倉千代子）、「あん時やどしや降り」（春日八郎）、「哀哭」（加橋かつみ）、「夢よもう一度」（真木ひでと）、「人生の並木路」（加橋・真木）
- ④ 島倉千代子、春日八郎、こまどり姉妹、殿さまキングスに、異色演歌歌手、元タイガースのトップこと加橋かつみと、元オックスの野口ヒデトこと真木ひでとの二人が出演する。
- 第一部は”初恋の歌”特集で、島倉が「からたち日記」、春日が「あん時やどしや降り」など。
- 第二部は、こまどり姉妹が歌う遠藤実のヒット曲特集。
- かつてはグループサウンズの星としてヤングを熱狂させた加橋と真木は演歌歌手として再登場し、演歌歌手としてのそれぞれのデビュー曲「哀哭」「夢よもう一度」を披露する他、二人で「人生の並木路」を歌い大人のムードで迫る。

昭和50年10月20日

- ①「競演！夜と酒場と流し唄」 #190
- ②田端義夫、都はるみ、ちあきなおみ、藤圭子、中条きよし
- ③「ズンドコ節」（全員）、「新宿の女」（藤）、「雨の屋台」（田端）、「かりそめの恋」（都）、「君待てども」（中条）、「恋の曼珠沙華」（藤圭子）、「別れ船」（田端）、「涙の連絡船」（都）、「銀座カンカン娘」（ちあき）
- ④ 田端義夫、都はるみ、ちあきなおみ、藤圭子、中条きよしをゲストに迎え、飲み屋スタイルのセットをバックに夜の盛り場をテーマにした曲を特集。
- 「ズンドコ節」を皮切りに、藤が「新宿の女」、田端が「雨の屋台」と続き、終戦直後のヒット曲特集では都が「かりそめの恋」、中条が「君待てども」、藤が「恋の曼珠沙華」を歌う。
- また、”田端ブシ””はるみブシ”と独特のフシまわしを持つ二人が「別れ船」「涙の連絡船」を披露し、それぞれのフシまわしが完成するまでの苦心談も語られる。
- “思い出の歌・心の歌”コーナーは、埼玉県の主婦・柿沼英美さんのリクエスト「銀座カンカン娘」を、ちあきが歌う。

昭和50年10月27日

- ①「絶唱！鶴田浩二、男の世界」 #191
- ②鶴田浩二、松尾和子、青江三奈、村田英雄、甲飛13期会メンバー
- ③「赤と黒のブルース」（鶴田）、「誰よりも君を愛す」（松尾）、「伊勢佐木町ブルース」（青江）、「王将」（村田）、「傷だらけの人生」（村田）、「あゝ紅の血は燃ゆる」（不明）、「同期の桜」（不明）、「あゝ戦友」（不明）
- ④ 映画スターとして、また歌手として大きな足跡を残してきた鶴田浩二をメインゲストに迎え、二枚目だった初期のヒット曲から最近のヒット曲までを特集、鶴田の持つ独特の男の世界を探る。特別ゲストに村田英雄と、旧海軍甲種飛行予科練習生十三期生の集まり「甲飛13期会」のメンバーが登場。
- 第一部は、甘い二枚目だった初期のヒット曲集。鶴田が「赤と黒のブルース」、松尾和子が「誰より

昭和50年

も君を愛す」、青江三奈が「伊勢佐木町ブルース」などを歌う。

第二部は、厳しい男を演じる俳優に変貌した人間鶴田の魅力を。村田英雄の出演で、「王将」「傷だらけの人生」など男の歌を特集。

そして第三部は、鶴田と切り離しては考えられない戦争体験、戦没者への想いを託した曲の特集。「あゝ紅の血は燃ゆる」「同期の桜」「あゝ戦友」など、戦没者への鎮魂歌を披露。歌の合間に、鶴田を中心に、戦友とは何かなどについて語り合う。

昭和50年11月3日

- ①「あの思い出のゴールデンヒット」 #192
- ②ディック・ミネ、近江俊郎、菊池章子、織井茂子、三浦洸一、大津美子、藤島桓夫、一節太郎、北原謙二
- ③「山小舎の灯」(近江)、「星の流れに」(菊池)
- ④ ディック・ミネ、近江俊郎、菊池章子らベテラン歌手9人の出演で、戦前、戦後から昭和30年代にかけてのゴールデンヒットの特集を送る。

なお、当日の中日新聞ではサブタイトルが「ああ思い出のゴールデンヒット」となっている。

第一部は、近江が「山小舎の灯」、菊池が「星の流れに」などを、終戦直後の体験談を交えて披露。

“遠藤実・心の歌”では、遠藤学校一期生の藤島桓夫、一節太郎、北原謙二が、デビュー曲を歌う。

昭和50年11月10日

- ①「競演！女ごころ・男ごころ」 #193
- ②田端義夫、水前寺清子、三田明、由紀さおり、和田弘とマヒナスターズ
- ③「お座敷小唄」(水前寺・三田・由紀・マヒナ)、「島育ち」(田端)、「裏町人生」(水前寺)、「カスバの女」(三田)、「女の意地」(由紀)、「大利根月夜」(田端)、「旅笠道中」(田端)、「妻恋道中」(水前寺)、「北上夜曲」(マヒナ)
- ④ 田端義夫、水前寺清子、由紀さおり、三田明、和田弘とマヒナスターズの出演で、歌謡曲にあらわれた”女ごころ””男ごころ”を分析しながらヒット曲でつづる。

第一部は女ごころの歌の特集。田端を除く全員で「お座敷小唄」、田端が「島育ち」、水前寺が「裏町人生」、三田が「カスバの女」、由紀が「女の意地」を歌う。

第二部は男ごころの歌の特集。田端が「大利根月夜」「旅笠道中」で男のつらさカッコよさを、水前寺が「妻恋道中」を披露、股旅ものの特徴などを語り合う。また、イキな遊び方について、田端が出演者一同に講義する。

読者のリクエストによる“思い出の歌、心の歌”は「北上夜曲」。マヒナスターズが歌う。

昭和50年11月17日

- ①「ああ！郷愁のふるさと艶歌」 #194
- ②島倉千代子、美輪明宏、菅原洋一、あべ静江
- ③「りんどう峠」(島倉)、「琵琶湖周航の歌」(菅原)、「荒城の月」(菅原)、「知床旅情」(あべ)、

「惜別の歌」(美輪)、「東京の人よさようなら」(島倉)、「逢いたいなアあの人に」(島倉)、
「哀愁のからまつ林」(島倉)、「ヨイトマケの唄」(美輪)

- ④ 島倉千代子、美輪明宏、菅原洋一、あべ静江という異色の顔合わせで、“ふるさと”をテーマにした曲を特集。

美輪が視聴者からのリクエストにこたえ、昭和40年のヒット曲、長編「ヨイトマケの唄」を、全曲ノーカットで絶唱するのが話題。

第一部の“ふるさとの歌”特集は、島倉が「りんどう峠」、菅原が「琵琶湖周航の歌」と「荒城の月」、あべが「知床旅情」、美輪が「惜別の歌」。

第二部“遠藤実心の歌”コーナーは、島倉千代子特集。「東京の人よさようなら」「逢いたいなアあの人に」「哀愁のからまつ林」など、“島倉ブシ”をたっぷりと披露し、その特徴や魅力を分析する。

昭和50年11月24日

- ①「慕情！東京恋唄・なさけ唄」 #195
②藤山一郎、朝丘雪路、青江三奈、尾崎紀世彦、ちあきなおみ
③「東京ラブソディー」(全員)、「東京の屋根の下」(尾崎)、「東京ブギウギ」(朝丘)、「夢淡き東京」(藤山)、「東京ブルース」(ちあき)、「赤坂の夜は更けて」(青江)
④ ベテラン藤山一郎をはじめ、朝丘雪路、青江三奈、尾崎紀世彦、ちあきなおみらの出演で、都会、特に東京を歌ったヒット曲、ムード演歌を特集。

第一部は、全員で「東京ラブソディー」を皮切りに尾崎が「東京の屋根の下」、朝丘が「東京ブギウギ」、藤山が「夢淡き東京」など、終戦直後のヒット曲を歌う。

第二部は夜の東京を歌ったムード演歌。ちあきが「東京ブルース」、青江が「赤坂の夜は更けて」ほか。

つづく“遠藤実心の歌”は、古賀政男・藤山一郎コンビの特集。

昭和50年12月1日

- ①「任侠！男の花道」 #196
②北島三郎、水前寺清子、五木ひろし、三橋美智也
③「名月赤城山」(五木・水前寺・北島)、「一本刀土俵入り」(三橋)、「旅鴉」(五木)、「赤城の子守唄」(水前寺)、「流転」(北島)、「唐獅子牡丹」(水前寺・五木)、「おさげと花と地藏さんと」(三橋)、「郷愁」(三橋)「誰か故郷を想わざる」(五木)
④ 北島三郎、水前寺清子、五木ひろし、三橋美智也の出演で、“男の世界”や“ふるさと”をテーマにした曲を中心に送る。

第一部は、任侠股旅ソング特集。五木、水前寺、北島の三人で「名月赤城山」、三橋が「一本刀土俵入り」、五木が「旅鴉」、水前寺が「赤城の子守唄」、北島が「流転」を歌い、股旅ものを歌っている時の気持ちや、股旅ものの変遷などを、出演者が語り合う。

第二部は根性もの特集。水前寺と五木で歌う「唐獅子牡丹」ほか。

第三部は、三橋を中心に、ふるさともの特集を送る。三橋で「おさげと花と地藏さんと」と新曲「郷愁」。五木が、愛知県の主婦菅原すみ子さんのリクエスト「誰か故郷を想わざる」を歌う。

昭和50年

昭和50年12月8日

- ①「艶歌！恋・涙・別れ」 #197
- ②森進一、都はるみ、春日八郎、野川明美
- ③「花と蝶」（森）、「ひとり盛り場で」（森）、「年上の女」（森）、「命かかれても」（森）、「盛り場ブルース」（森）、「雨降る街角」（春日）、「別れの波止場」（春日）、「赤いランプの終列車」（都）、「女の海峡」（都）、「好きになった人」（都・野川）、「恋の雪舞」（野川）、「北の宿から」（都）、「お富さん」（全員）
- ④ ベテラン春日八郎、森進一、都はるみの実力派三人に、今年デビューした都の妹、野川明美を加えた顔ぶれで送る。

第一部は森のヒット曲特集。「花と蝶」「ひとり盛り場で」「年上の女」「命かかれても」「盛り場ブルース」ほか。

第二部は、「雨降る街角」「別れの波止場」「赤いランプの終列車」など、“別れ”をテーマにした春日のヒット曲。歌の合間に、出演者がそれぞれ体験した最も悲しい別れの思い出を披露する。

続く“思い出の歌”は、福井県の公務員土肥隆さんが亡き母を偲んだ詩を奈良岡朋子が朗読。

第三部は、都・野川姉妹の出演で「おんなの海峡」「好きになった人」を歌い、姉から見た妹、妹から見た姉のプロフィールを語り合う。

昭和50年12月15日

- ①「夜の艶歌！酒・涙・ブルース」 #198
- ②ディック・ミネ、フランク永井、坂本スミ子、黒沢明とロス・プリモス、藤圭子
- ③「上海ブルース」（ディック・フランク）、「圭子の夢は夜ひらく」（藤）、「ラブユー東京」（ロス・プリモス）、「赤いグラス」（坂本）、「哀愁の街に霧が降る」（フランク・藤）
- ④ 都会の夜のムードを盛り込んだモダン演歌やブルースを、ディック・ミネ、フランク永井、坂本スミ子、黒沢明とロス・プリモス、藤圭子らの出演で特集する。

第一部は、ディックとフランクの「上海ブルース」、藤の「圭子の夢は夜ひらく」、ロス・プリモスの「ラブユー東京」ほか。

第二部は、ナイトクラブ風のセットで坂本が「赤いグラス」、フランクと藤が「哀愁の街に霧が降る」ほかを歌う。

昭和50年12月22日

- ①「初共演！石原裕次郎・北島三郎男の詩」 #199
- ②石原裕次郎、北島三郎、和田弘とマヒナスターズ
- ③「俺は待ってるぜ」（石原・北島）、「なみだ船」（北島三郎）、「錆びたナイフ」（石原裕次郎）、「泣かないで」（不明）、「北帰行」（不明）、「俺はお前に弱いんだ」（不明）、「赤いハンカチ」（石原）、「酒は涙か溜息か」（石原・北島・遠藤）、「船頭小唄」（石原）、「無情の夢」（北島）、「兄弟仁義」（石原・北島）
- ④ 共演は初めてという石原裕次郎と北島三郎に、和田弘とマヒナスターズを加えたメンバーで、男の哀愁をたっぷり味わってもらおうという趣向。

第一部は、海、波止場、船などをテーマにしたヒット曲特集。石原と北島のデュエットで「俺は待ってるぜ」を皮切りに北島が「なみだ船」ほかを、石原が「錆びたナイフ」ほかを歌い、息の合ったところを見せた。また、デビュー当時の印象などを語り合う。

第二部は、マヒナとの共演で「泣かないで」「北帰行」「俺はお前に弱いんだ」、そして石原が視聴者のリクエスト「赤いハンカチ」を歌う。

第三部は、なつメロ特集。木村好夫のギター演奏で石原、北島、遠藤実の三人で「酒は涙か溜息か」、石原が「船頭小唄」、北島が「無情の夢」、最後は、石原と北島で「兄弟仁義」をじっくりと歌い上げる。石原は「初共演が決まってから、車の中でも”兄弟仁義”練習をしたけど、この歌は難しいヨ！」。

昭和50年12月29日

- ①「特集！200回記念・歌まつり花の饗宴」 #200
- ②美空ひばり、春日八郎、ディック・ミネ、三橋美智也、北島三郎、水前寺清子、都はるみ、青江三奈
- ③不明
- ④ 放送二百回を記念して、美空ひばり、ディック・ミネをはじめ、おなじみの実力派歌手たちが勢揃いする。番組はパーティー形式で進められ、出演歌手たちがそれぞれ得意の曲を歌い、歌にまつわるエピソード、今年の回顧、来年への抱負などを語る。

昭和51年1月5日

- ①「新春歌絵巻！ひばり艶姿」 #201
- ②美空ひばり、橋幸夫
- ③「黒田節」（不明）、「明治一代女」（不明）、「島の娘」（不明）、「湯島の白梅」（不明）、「雨の中の二人」（不明）、「霧氷」（不明）、「港町十三番地」（不明）、「ある女の詩」（不明）
- ④ 今年、芸能生活三十周年を迎える美空ひばりと、橋幸夫の顔合わせ。
第一部は、芸者姿のひばり、羽織袴姿の橋で、日本調の特集。曲は、「黒田節」「明治一代女」「島の娘」「湯島の白梅」ほか。
第二部は、それぞれドレス、スーツに着替えてのモダン演歌特集で、「雨の中の二人」「霧氷」「港町十三番地」「ある女の詩」ほか。

昭和51年1月12日

- ①「競演！愛の演歌十八番」 #202
- ②北島三郎、島倉千代子、都はるみ、八代亜紀
- ③「新妻鏡」（島倉千代子）、「白い樅の歌」（八代亜紀）
- ④ 北島三郎、島倉千代子、都はるみ、八代亜紀の出演で送る。
第一部は、愛をテーマにした演歌の特集。曲は、「新妻鏡」（島倉）、「白い樅の歌」（八代）ほか。
第二部は、島倉が歌手生活二十年の思い出を語りながら、ヒット曲を披露。
第三部は、酒場風のセットで、出演者が持ち歌を交換したり、しりとり歌合戦を展開したりする。

昭和51年

昭和51年1月19日

- ①「泣き笑い演歌一代！」 #203
- ②小林旭、五月みどり、こまどり姉妹、笹みどり、田端義夫、遠藤実、遠藤実夫人
- ③「純子」(小林)、「おひまなら来てね」(五月)、「浅草姉妹」(こまどり)、「星影のワルツ」(遠藤 (VTR))、「流転」(遠藤 (VTR))、「妻に捧げる歌」(遠藤)
- ④ 昨年9月からレギュラーゲストとして出演してきた作曲家の遠藤実が今回を最後にレギュラーを降りる。そこで、遠藤のヒット曲を、小林旭、こまどり姉妹、五月みどりらの出演で特集、その作品をあらゆる角度から分析する。

また、流しの歌手出身の遠藤が二十年ぶりに昔にかえって、当時愛用したギターを抱え、夜の町を流し、客の求めに応じて「星影のワルツ」「流転」などを歌う様子もVTRで紹介する。

作曲家遠藤を生むきっかけになったのは田端義夫が歌った「ふるさとの灯台」(昭和28年)を初めて聞いた時だという。そこでこの曲を田端が遠藤のためにプレゼントする。

また、普通は決して表へ出ないことで有名な遠藤夫人を横にして、遠藤自ら自作の「妻に捧げる歌」を歌う。これに夫人は感極まって大粒の涙。

昭和51年1月26日

- ①「哀愁艶歌！吉田正の世界」 #204
- ②フランク永井、松尾和子、三浦洸一、和田弘とマヒナスターズ、吉田正、増田幸治
- ③「東京ナイトクラブ」(フランク・松尾)、「東京の人」(三浦)、「好きだった」(マヒナ)、「異国の丘」(フランク・神山・吉田・増田・三ツ矢)
- ④ 作曲家吉田正を迎え、”吉田学校”の優等生、フランク永井、松尾和子、三浦洸一、和田弘とマヒナスターズらの出演で、吉田メロディーを特集する。

工業学校出身の吉田が、なぜ作曲家を志したかをインタビューするほか、出演者から見た吉田のプロフィールなどを紹介。また、「異国の丘」の作詞者増田幸治が登場、吉田と苦しかった捕虜収容所時代の思い出を語り合う。

曲は、フランク、松尾のデュエットで「東京ナイトクラブ」、三浦の「東京の人」、マヒナの「好きだった」ほか。

昭和51年2月2日

- ①「熱唱ああ浪漫の大演歌」 #205
- ②五木ひろし、島倉千代子、水前寺清子、青江三奈、麻生良方
- ③「カチューシャの唄」(不明)、「さすらいの唄」(不明)、「船頭小唄」(不明)、「君恋し」(不明)、「無情の夢」(不明)、「湖畔の宿」(不明)、「亡き母に捧ぐ詩」(島倉)
- ④ 五木ひろし、島倉千代子、水前寺清子、青江三奈の出演で、大正から昭和初期にかけての浪漫演歌を特集する。

第一部は”大正演歌”特集で、「カチューシャの唄」「さすらいの唄」「船頭小唄」ほかを、第二部”昭和初期の浪漫演歌”特集では、「君恋し」「無情の夢」「湖畔の宿」ほかを、出演者が歌う。

また、ゲストの政治評論家麻生良方が、かつて大恋愛で結ばれた夫人に捧げた自作の詩を朗読。

”思い出の歌”コーナーは、ロサンゼルス在住の日本人主婦から寄せられた母をしのぶ便りを奈良岡朋子が朗読、この手紙についていた詩に遠藤実が曲をつけた「亡き母に捧ぐ詩」を島倉が歌う。

昭和51年2月9日

- ①「慕情！港町艶歌」 #206
- ②ディック・ミネ、森進一、都はるみ、由紀さおり、前田武彦
- ③「港町ブルース」(森・都・由紀)、「長崎エレジー」(ディック)、「星の流れに」(森)、「或る雨の午後」(ディック・都)、「二人は若い」(ディック・由紀)
- ④ ベテラン、ディック・ミネを、戦後派の森進一、都はるみ、由紀さおりが囲むという形で、波止場ものを中心としたヒット曲を特集。
第一部は波止場もの特集。森、都、由紀の「港町ブルース」、ディックの「長崎エレジー」ほか。
第二部は、前田武彦をゲストに迎えて歌謡曲談義。終戦直後の焼け跡闇市時代の思い出の歌の中から、森の「星の流れに」ほか。
第三部は、ディック・ミネ・コーナーで、ディックが都と組み「或る雨の午後」、由紀と組んで「二人は若い」を歌う。

昭和51年2月16日

- ①「決定版！花の股旅三度笠」 #207
- ②三波春夫、春日八郎、水前寺清子、藤田まさと
- ③「旅笠道中」(春日・水前寺・三波)、「鴛鴦道中」(春日)、「お駒恋姿」(水前寺)、「流転」(三波)、「お富さん」(春日)、「ちゃんちきおけさ」(三波・水前寺)、「雪の渡り鳥」(三波)
- ④ 三波春夫、春日八郎、水前寺清子の顔合わせで、股旅歌謡作詞の藤田まさとをゲストに迎え、彼のヒット曲を特集、歌謡曲談義などを送る。
第一部は藤田まさとヒット曲特集。春日、水前寺、三波の三人で「旅笠道中」、春日の「鴛鴦道中」、水前寺の「お駒恋姿」、三波の「流転」など。
第二部は陽気な手拍子もの特集。春日の「お富さん」、三波、水前寺の「ちゃんちきおけさ」など。
視聴者のリクエストコーナーは、三波の「雪の渡り鳥」など。

昭和51年2月23日

- ①「あゝ戦友！涙で綴る軍国歌謡」 #208
- ②田端義夫、三橋美智也、村田英雄、細川潤一、鎌多俊与、日本合唱協会
- ③「麦と兵隊」(田端・三橋・村田)、「上海だより」(田端)、「軍国子守唄」(三橋)、「流砂の護り」(村田)、「戦友」(日本合唱協会)、「あゝわが戦友」(鎌多・村田)、「母と兵隊」(田端)
- ④ 演歌のベテラン、田端義夫、三橋美智也、村田英雄の三人を迎えて、昭和12年から16年頃にかけてヒットした軍歌、特に妻子、望郷の思いをうたい上げた曲を特集。
三人による「麦と兵隊」を皮切りに、田端が「上海だより」、三橋が「軍国子守唄」、村田が「流砂の護り」ほかを歌う。軍歌の”古典”とも言うべき「戦友」を日本合唱協会が歌った後、ゲストの作

昭和51年

曲家細川潤一、鎌多俊与の両氏が登場、戦没した兵士たちへの祈りを込めて細川作曲の「あゝわが戦友」を鎌多と村田が披露する。

視聴者のリクエストによる”思い出の歌”は、田端の歌で「母と兵隊」。田端が「母と兵隊」のとりもつ縁で知った老婦人と三十年ぶりに感激の対面もする。

昭和51年3月1日

①「競演！夜とムードの酒場艶歌」 #209

②石原裕次郎、江利チエミ、橋幸夫

③「夜霧よ今夜も有難う」(石原)、「銀座の恋の物語」(石原・江利)、「俺はお前に弱いんだ」(石原・橋)、「粹な別れ」(石原)、「泪の乾杯」(橋)、「赤いグラス」(橋)、「雨の酒場で」(石原)、「ウナ・セラ・ディ東京」(江利)、「酒は涙か溜息か」(石原・江利・橋)、「雨のブルース」(石原)、「小雨の丘」(江利)

④ 石原裕次郎、江利チエミ、橋幸夫の顔合わせで都会の夜のムード曲を特集する。

第一部は「裕次郎のヒット曲特集」で、「夜霧よ今夜も有難う」、石原と江利で「銀座の恋の物語」、石原と橋で「俺はお前に弱いんだ」と続き、ラストは再び石原の「粹な別れ」。

第二部は「酒場にちなんだナツメロ特集」。橋が「泪の乾杯」「赤いグラス」、石原が「雨の酒場で」、江利が「ウナ・セラ・ディ東京」、三人で「酒は涙か溜息か」ほか。歌の合間に、それぞれの歌にちなんだエピソードやお酒についての失敗談などを語り合う。

第三部は戦前のヒット曲の中から好きな歌を選んで、石原が「雨のブルース」、江利が「小雨の丘」を歌う。

また、語り手を担当してきた奈良岡朋子が引っ張り出されて初めて顔を出して一曲。「歌番組には出たことがないのよ。それに裕ちゃんたら突然歌わせるんですもの」と言いながらも、この日のゲストの三人に囲まれてとてもうれしそうだった。

昭和51年3月8日

①「山口淑子思い出の愛唱歌集」 #210

②山口淑子、砂原美智子、灰田勝彦、青江三奈、伊東ゆかり、しばたはつみ

③ **(出演順)**「蘇州夜曲」(青江)、「何日君再来」(伊東)、「蘇州の夜」(しばた)、「いとしあいの星」(伊東・しばた・青江)、「荒城の月」(砂原)、「新雪」(灰田)、「東京夜曲」(青江)、「夜来香」(山口(朗読)・しばた)、「私の鶯」(砂原)、「バタビヤの夜は更けて」(灰田)、「わかれ雪」(伊東)、「ショウガール」(しばた)、「霧の港・神戸」(青江)、「燦めく星座」(灰田)、「森の小径」(全員)

④ 山口淑子を特別ゲストに迎え、砂原美智子、灰田勝彦、青江三奈、伊東ゆかり、しばたはつみらが、山口のヒット曲や懐かしの名曲を歌う。

第一部は、一世を風靡した大スター”李香蘭”時代の山口のヒット曲特集で、青江の「蘇州夜曲」、伊東「何日君再来」ほか。歌の合間に山口を中心に、それぞれの歌にちなむエピソードを語り合う。

第二部は戦後、山口淑子になってからのヒット曲「東京夜曲」ほか。「夜来香」の冒頭の美しい中国語の詩を山口が朗読する。また、昭和19年、李香蘭主演で制作されながら「時局向きでない」とい

う理由で上映されなかった幻の映画「私の鶯」の主題歌を砂原が歌う。また、灰田の歌で山口が一番好きだという「新雪」を灰田が歌う。

「思い出の歌★心の歌」は、旭川市の古角たかしさんのリクエストによる「バタビヤの夜は更けて」を灰田が歌う。

第三部は、灰田勝彦ヒット曲集で、「燦めく星座」ほか。

昭和51年3月15日

- ①「熱唱！五木ひろし・涙と栄光の蔭に」 # 211
- ②五木ひろし、菅原都々子、若原一郎、青木光一、財津一郎、上原愛子、前田利明
- ③「千曲川」（五木）、「リンゴの唄」（五木）、「かえり船」（五木）、「おーい中村君」（五木）、
「愛の始発」（五木）、「新宿駅から」（五木）、「流浪の旅」（財津）
- ④ 五木ひろしが大正時代の名曲、終戦直後のヒット曲、12年前のデビュー曲、そして最新曲まで十数曲を歌いまくる。五木の「千曲川」で始まり、ついで、“のど自慢巡業”までしたという五木の少年時代の愛唱歌集をメドレーで披露する。また、五木があこがれていた菅原都々子、若原一郎、青木光一が登場、それぞれのヒット曲を歌い、一曲ずつ五木と共演する。

また、最近、美声を買われて「財津一郎・流浪のうた」と題するLPを最近出した財津が歌謡番組に初出演。五木と一緒に”歌の心”や、貧乏時代のエピソードを語り合う他、大正時代の名曲「流浪の旅」ほかを歌う。

”思い出の歌”コーナーは、五木が昭和39年、16歳でデビューした時の曲「新宿駅から」を、恩師である故上原げんと夫人・愛子を前に歌う。愛子の他、愛子の弟で作曲家の前田利明がゲスト出演し、五木のデビュー当時の思い出を語る。

昭和51年3月22日

- ①「大演歌！男一匹お控えなすって」 # 212
- ②北島三郎、都はるみ、こまどり姉妹、杉良太郎、ガッツ石松
- ③「唐獅子牡丹」（杉・都・北島）、「仁義」（北島）、「緋牡丹博徒」（都）、「東京流れ者」（杉）、
「三味線姉妹」（こまどり）、「裏町人生」（都・杉）、「男なら」（ガッツ・都・杉）、
「ギター仁義」（北島）、「旅姿三人男」（ガッツ）、「未練ごころ」（こまどり）
- ④ 北島三郎、都はるみ、こまどり姉妹に杉良太郎、それにボクシング・ライト級世界チャンピオンのガッツ石松を加えたメンバーで、“男”の演歌を特集。ガッツ石松は旅人姿で仁義をきってみせる。また、杉良太郎とガッツ石松が、北島三郎らとともに渋いノドをきかせる。

杉、都、北島が歌う「唐獅子牡丹」で始まり、北島の「仁義」、都の「緋牡丹博徒」、杉の「東京流れ者」と続き、飲み屋風にしつらえたセットで、こまどり姉妹と北島が流し時代の思い出話を披露し、こまどり姉妹が「三味線姉妹」、都と杉が「裏町人生」などを歌う。更にガッツ石松が都、杉との競演で「男なら」を歌い、北島の「ギター仁義」で締めくくる。

「旅姿三人男」の一節で“森の石松”の部分で“ガッツ石松”と替えて歌って大好評。視聴者のリクエストによる”思い出の歌心の歌”は、こまどり姉妹の「未練ごころ」。

昭和51年

昭和51年3月29日

- ①「慕情演歌・宮地おさむ涙の告白！」 # 2 1 3
- ②春日八郎、水前寺清子、殿さまキングス、八代亜紀、水の江滝子
- ③「別れの一本杉」（春日）、「湖底の故郷」（八代）、「中国地方の子守唄」（水前寺）、
「誰か故郷を想わざる」（殿さま）、「花言葉の唄」（水前寺）、「涙の渡り鳥」（八代）、
「なみだの操」（殿さま）、「母恋吹雪」（宮地）、
- ④ 春日八郎、水前寺清子、殿さまキングス、八代亜紀、それに水の江滝子をまじえて、“ふるさと演歌”
を中心に、なつかしい名曲の数々を送る。

第一部は、春日の「別れの一本杉」を皮切りに、八代が「湖底の故郷」、水前寺が「中国地方の子守唄」、殿さまキングスが「誰か故郷を想わざる」ほかを歌い、それぞれ故郷の思い出を語り合う。

第二部は、水の江滝子がSKD時代の思い出を語り、当時、地方巡業などに行くによく歌ったという「花言葉の唄」を水前寺が、「涙の渡り鳥」を八代が歌う。

第三部は殿さまキングス特集で、下積み時代の思い出話を語りながら、「なみだの操」を歌い、宮地おさむが亡き祖母をしので「母恋吹雪」を披露する。